

11月25日に垂井町文化財保護協会主催で天正3年(1575)に織田信長・徳川家康と武田信玄の死後、武田家を継いだ勝頼が設楽原・長篠で戦った跡や長篠城跡を見学してきました。

設楽原歴史資料館の近くに史蹟長篠城址跡保存館があり、その史蹟前で写真です。このときの火縄銃を中心に戦いの勝敗を決めてに使われた復元の馬防柵です。



天正3年(1575)5月、武田勝頼は1万5000の軍勢で奥平貞昌(のちの信昌)が籠る長篠城(愛知県新城市)を攻囲した。長篠城の城兵は、わずか約500だったという。5月8日に長篠城の攻防が始まると、城内の兵糧が乏しくなり、長篠城は落城のピンチに陥った。

貞昌は援軍を要請すべく、家康の居城・岡崎城(愛知県岡崎市)へ使者を送ることにしたが、長篠城は武田氏の大軍に攻囲されており、極めて困難だった。この状況下において、使者を志願したのが鳥居強右衛門である。

5月14日、強右衛門は長篠城を発つと、武田軍の監視を逃れるため、川を潜って移動した。5月15日の朝、強右衛門は雁峰山から狼煙を上げ、脱出に成功したことを長篠城に知らせた。午後には岡崎城に到着し、家康に援軍の要請を行ったのである。

家康は織田信長に援軍を求め、織田軍3万、徳川軍8000の計3万8000の軍勢を長篠城に送り込むことになった。強右衛門は計画を貞昌に伝えるべく、長篠城へと急いだ。5月16日早朝、強右衛門は雁峰山から狼煙を上げ、長篠城に入城する旨を知らせたのである。

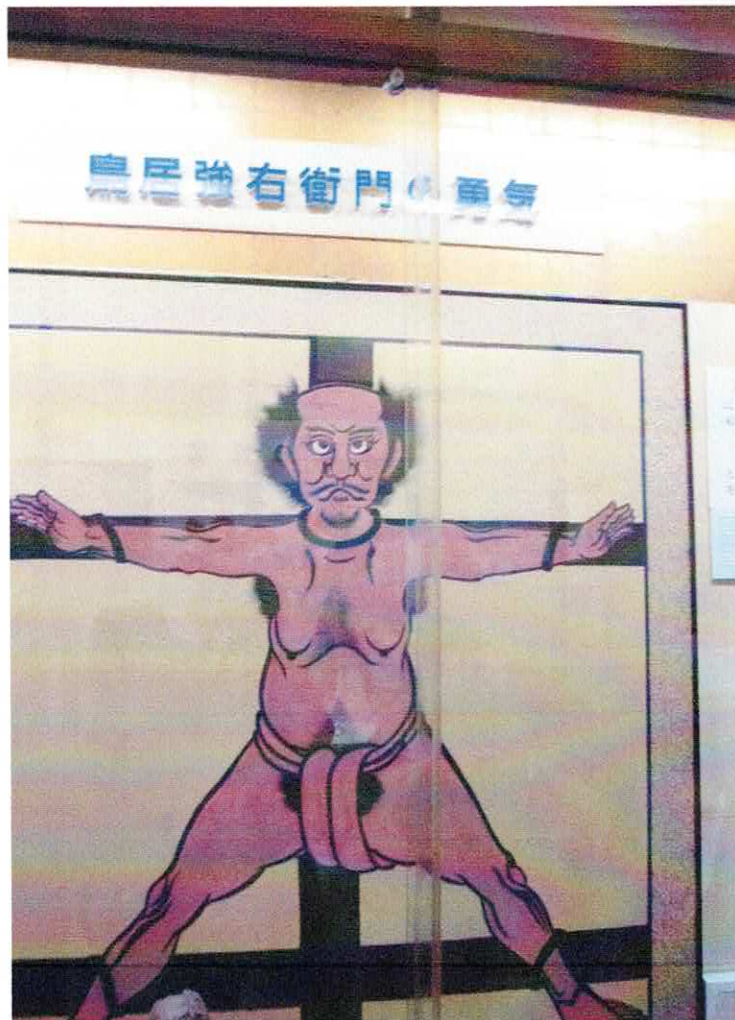
しかし、武田軍は烽火が上がるたびに城内から歓声が上がるのを不審に思い、警戒態勢を強めていた。結果、強右衛門は長篠城の近くで武田軍に捕らえられた。強右衛門を取り調べると、織田・徳川連合軍3万8000が長篠城に向かっていることを知った。

勝頼は強右衛門に命を助け、武田家の家臣として迎えるという条件を示し、「長篠城には織田・徳川の援軍は来ないので、すみやかに城を明け渡せ」と虚偽の情報を伝えるよう求めた。強右衛門は勝頼の命令に応じ、長篠城西岸の見通しのよい場所へ連行された。

ところが、強右衛門は長篠城の城兵に対して、「あと2・3日で援軍が来るので、それまで持ち堪えよ」と叫んだ。勝頼は強右衛門の裏切りに激昂し、配下の者に殺害させたといわれているが、今では磔にしたという説が有力視されている。

注：この文章は[長篠城の攻防はじまる！鳥居強右衛門は、なぜ磔になったのだろうか\(渡邊大門\)](#)から全引用しました。

長篠城址跡内にある鳥居強右衛門の案内板です。



設楽原歴史資料館内にある磔の鳥居強右衛門の写真です。

長篠城は三河国の東端、遠江国との国境地域に位置し、交通の要衝として戦国大名たちが争奪戦を繰り返した。また、天正3年(1575)には、日本史上有数の戦いである「長篠・設楽原の戦い」がこの城を巡って勃発した。

長篠城の特徴

後堅固の城長篠城は宇連川(大野川)と豊川(寒狭川・滝川)が合流する地点に築城されており、南・西の二方向を急峻な崖に守られた「後堅固の城」となっている。その一方、平坦地である北・東側には曲輪や土塁・堀を複数配置しており、防御力を向上させていることがわかる。

土塁と内堀

長篠城主郭の北東部には巨大な土塁と堀が残されている。土塁は高さ約5m、長さ約80mに及び、横矢掛りを意識した屈曲がみられる。土塁に沿って幅10~15m、深さ約6mの堀が残存し、いずれも武田氏の侵攻に備え徳川氏により改修されたと推定されている。

長篠・設楽原の戦い

長篠城を巡る攻防

天正3年4月21日、武田勝頼は15,000人の兵を率いて東三河への侵攻を開始し、5月1日、武田軍は長篠城を取り囲んだ。以後、20日間にわたる長篠・設楽原の戦いの始まりである。

長篠城には奥平貞昌を城主に500人の兵が籠っていた。10日、武田軍は大手門を攻撃した。籠城兵は大手門から城外へ出て、これに応戦。武田軍はいったん退却。翌11日深夜、再度攻撃を加えてきた。これに対して、貞昌は弓矢や鉄砲で応戦するように命じ、武田軍は800人を超える戦死者や負傷者を出したといわれている。

14日、武田軍は門際まで攻め込んできた。長篠城に籠る重臣たちも槍を手に取り応戦。籠城兵も怪我をするものも多く、徐々に疲労が重なってきた。食料も乏しくなり始め、籠城も限界に近づいてきた。その夜、城内で軍議が行われ、城の窮状を伝えるべく、鳥居強右衛門と鈴木金七郎を岡崎への使者として派遣することとした。城を無事に脱出した二人は岡崎へと走っていった。

岡崎城にはすでに30,000人の兵を引き連れた織田信長がおり、徳川家康と共に長篠城を救うための準備をしていた。強右衛門と金七郎は信長と家康に長篠城や武田軍の状況を伝えることに成功した。その足で長篠城への帰路についた強右衛門は長篠城内に入ろうとしたところ武田軍に捕縛された。強右衛門は城内へ「援軍来る！」叫び、磔となった。

設楽原の決戦

岡崎城を出発した信長と家康は、18日に設楽原に到着。さっそく設楽原を流れる連吾川沿いに馬防柵を築きはじめた。その長さはおよそ2キロに及んだ。

一方、武田軍は本陣の置かれていた医王寺に重臣が集まり、軍議が行われた。連合軍の軍勢の多さ、布陣の様子などを遠くに臨み、武田軍の不利を述べる重臣もいれば、決戦に積極的な重臣もいた。その結果、「武田軍に勝算あり」という結論に至った勝頼

は設楽原へと陣を遷すことを決断した。翌20日、蔦ヶ巣山や長篠城の周辺に一部の兵を残し、武田軍は寒狭川を渡り、設楽原へと陣を進めた。連吾川の東側に陣地を構え、連合軍に相対した。

武田軍の布陣の様子を見た信長は、家康とその重臣酒井忠次を呼び、長篠城の対岸にある蔦ヶ巣山への奇襲攻撃をかけるよう命じた。蔦ヶ巣山には長篠



新城市設楽原歴史資料館

城を監視するために砦が築かれていた。この砦を奇襲することによって、長篠城を解放し、武田軍の背後に兵を回そうという作戦だった。忠次は東三河の諸将 3,000 人を率いて、家康の本陣である弾正山を 20 日の夜中に出発。豊川を渡り、月明かりを頼りに夜中の山道を歩き、鳶ヶ巣山を急襲した。

鳶ヶ巣山での戦いを知った勝頼は連合軍に向かって突撃することを命じた。決戦場となった設楽原は連合軍が陣地を置いた弾正台地と武田軍が陣地を置いた信玄台地に挟まれ、その中央は連吾川が流れ、その両岸には田が広がっていた。

決戦がおこなわれた旧暦の 5 月 21 日は、現在の暦では 7 月上旬にあたり、ちょうど梅雨明けの季節であった。

武田軍は連合軍に対して、鉄砲や矢を射かけて突破口をつくり、あぜ道や街道を辿りながら連合軍への攻撃を開始した。

連合軍は静かに馬防柵の背後に控えていた。武田軍の第一陣が連吾川に差し掛かった。鉄砲隊が武田軍に向かって 3,000 丁の火縄銃を放った。バタバタと倒れる武田軍の將兵。火縄銃による攻撃が止むと、それらの將兵を乗り越えて、武田軍がさらに攻撃を繰り返してきた。

連吾川の上流では武田軍の馬場信房が 700 人の兵で佐久間信盛を、内藤昌豊は 1,000 人の軍勢で、瀧川一益 3,000 人を柵内に追い込んだ。また連吾川の中ほどでは、山県昌景は 1,500 人の兵で徳川軍に攻め込み、やはり柵内に突入した。そして馬防柵が築かれていない連吾川の下流へ回り、徳川軍の背後から攻めようとした。そこで大久保忠世、忠佐兄弟と激突。9 度も渡り合ったといわれている。

このような戦いがおおよそ 6 時間続いたといわれている。

一進一退だった戦局が大きく動き始めたのは山県昌景の死だった。昌景の死によって山県隊は崩れ、その影響は武田軍全体に広がっていった。内藤昌豊、土屋昌次など、武田軍の名だたる武将が次々に討死し、武田軍の退却が始まっていった。

この激しい戦いで、戦死者は武田方 10,000 人、連合軍方 5,000 人だったともいわれている。多くの戦死者を埋葬した場所はやがて信玄塚と呼ばれるようになった。信玄塚では毎年お盆の夜に「火おんどり（県指定無形民俗文化財）」という戦没者供養が行われ、400 年以上も戦死者を弔っている。



頂いた設楽原歴史資料館のパンレットから引用しました。